
ホットニュース(平成16年度／第73号)

●今月の業界ホットニュース／美し国づくり

日本の都市社会は成熟期に入って、ようやく美しい都市づくり、美しい国づくりを標榜し始めた。戦後の都市づくりは、経済成長の波に乗って、経済原理に基づく性急で安普請の都市を拡大し、そしてバブルの崩壊とともに負の遺産、負の都市を残すこととなった。この反省にたつて、都市は投資や投機の対象ではなく、豊かな生活の場でありたい、そのためには良い環境を創りたいという声が大きくなってきた為であろう。

美しい街並みで誰もが思い浮かべるのは、小京都とか小江戸と呼ばれる地方の小都市や、山深い宿場町であろう。多くは大都市圏外で、やや交通不便で経済成長の波に取り残された感のあるおかげで和風の街並みが残され、近年その価値が見直されて、また観光資源にもなることから街並み保全に力を注いできたところである。ただし、それができるのは歴史的なストックがあり、伝統的なお祭りなどを中心として、文化的なものも含んだ地域アイデンティティを守ろうとする地域コミュニティが維持されているところが多いように思う。例えば、「小さな江戸を歩く(馬淵公介著、小学館文庫)」の中で、著者は飢肥の街を歩いていて、すれ違う小学生が次から次に「こんにちは」と挨拶してくれることに、身の引き締まる思いをしたと感激している。

これから美しい都市づくりに向けた取り組みが全国で始まることになるが、単にハードな景観のお化粧に留まるだけでなく、地域コミュニティを巻き込んだ都市づくりとすることが大切だと思う。

(代表取締役 堀田 紘之)

●最近のバスシステムの紹介(その1)

千葉県船橋市は、市内自動車学校・教習所の協力で、教習生用送迎バスの空席を利用した「高齢者支援協力バス」の試験運行を平成16年4月1日から行っています。バス停や駅から離れた地域に住む高齢者の足を確保する事業です。

船橋市は平成13年度にコミュニティバス導入に向けて検討を行いました。公平性、費用対効果などの諸問題により導入に関しては困難な状況に置かれていました。また、既存路線バスが規制緩和の影響により、事実上路線の撤退に歯止めがかからない状態にあり、交通不便地域が拡大していく懸念がありました。

以上のようなことから、各種企業が船橋市内で運行する送迎バスに着目し、TDM(交通需要マネジメント)の一環であるカープール(相乗り)を励行し、同時に交通不便地域の解消および高齢者の移動支援を行うことを目的とし、まず市内教習所の協力を得て、送迎バスの試験運行を実施することになりました。

利用料金は無料です。市から自動車教習所への補助はなく、教習所の全くの慈善事業です。

(第二計画部 高尾 利文)

●六本木ヒルズ自動回転ドアの事故から学ぶこと

ついこの前まで連日のように六本木ヒルズの自動回転ドアに男児が挟まれた事故に関する報道がされ、あるコメンテータなどは再開発事業そのも

のが悪いかのような批判をしていた。報道によると、メーカー側の設計ミス、ビルの管理責任、安全／管理ガイドライン等の不備などが問題視され、今後は行政を含めた対応が急務であるとされ、既に検討委員会が設立されているとのことである。

これを考えるにあたっては、民地内の施設であっても不特定多数が利用するものは「公共施設」であるという認識を高めていく必要があると思う。以前より言われていることではあるが、エレベータ・エスカレータなどの民地内の昇降施設も場合によっては立派な公共施設として位置づけられるべきで、殆ど通行のない道路よりある意味公共性が高い(!?)施設と言える。

また、近年のバリアフリー基本構想調査では、鉄道駅と周辺道路を中心として官民の役割を明確にし、その達成に向けた取り組みを担保しているが、更に進んで不特定多数が多く利用する民地内の施設に対しても対応できるような制度づくり(ハートビル法との連携)が必要と考えられている。

今回の事故は、これまで「管理」面からプライベート、パブリックの棲み分けがされてきたことに対して一種の警笛を鳴らしているのではないかと思う。これからは「管理」だけでなく「利用形態」からも施設を考え、その位置づけや制度のあり方を考えていく必要があるだろう。

(第一計画部 坂本 裕之)

アルメックホットニュース(平成16年4月15日発行)

////////////////////////////////////